

考古学用語の出土頻度の地域差

——土器に関係した用語を中心に——

百瀬正恒

-
- | | |
|--------------------|------------------|
| 1. はじめに | 3. 論文にみる土器に関する用語 |
| 2. 辞書にみる土器関係用語の使用例 | 4. まとめ |
-

論文要旨

考古学におけるデータベースの主流はいぜんとして文字型のものであり、この傾向は今後も続くものと考えられる。文字型データベースの形成に当たって問題になるのは、キーワードをどのように付与するかである。キーワード検索で、目的のデータを効率よくかつ網羅的に検索できれば、価値あるデータベースとなるが、これを事前にシミュレーションして作成する場合は少なく、検索するまでの項目でどの程度データがヒットするか、検索にかけないと結果が予想できないことが多い。

本項では、近年資料の蓄積が全国規模で行われ、製作技法・系統論の研究が活発である歴史時代の土器を対象に、土器に関係した用語に地域的な差異があるかどうか調べる。地域性がきわめて強い考古学の土器に対する索引作成が可能か、同じ用語で、別の概念を表すことはないのか、地域性は用語のどのような項目に現われているかを調べ、全国共通な索引の作成が可能かどうかみる。また、ここから派生する考古学情報をデータベース化する場合の問題点について検討する。

考古学用語の問題についてはこれまで余り問題にされなかったため、全国的なデータの収集が遅れている。今回は1990年に中世土器研究会が京都で開催した研究会の論文を資料として使い、先に述べた内容で検討する。

検討の結果、地域による用語の差は上位の概念ほど明確にあることが解った。しかし、土器の器形に関係した用語などは全国的に共通認識ができていくことが判明した。

現在、考古学の印刷物のほぼ100%が電算写植され、原稿の作成のかなりが、ワープロで行われている。したがって、全文テキストデータベースの作成は容易で、考古学に関係した用語の分析は、全国規模で行える条件があり、今後、分析と研究を深める必要がある。この作業によって地域による用語の相違・非相違が明確になり、今後の考古学研究に益するところが大きいものと考えられる。